

# ロマネスクー北見農業試験場



一般社団法人北海道植物防疫協会 常務理事

児玉 不二雄

Fujio Kodama

平成4年から7年、同9年から12年まで、合わせて満6年間、北見農業試験場で研究部長・場長として単身赴任した。以下その時々記した小文である。

## 【人生足別離】

4月は転勤や転校の時節で、別離と出会いが交錯する。別離などとは大袈裟だけれど、「人生足別離(おおし)シ」という言葉がふっと頭に浮かんでしまった。唐詩選に勸酒(酒ヲ勸ム)という作品がある。この句はその作品の一節だ。

原文の韻律も素敵で良いのだが、短編小説の名手井伏鱒二の口語訳が、また別の飄飄乎(ひょうひょうこ)とした詩になっている。

“コノ杯ヲ受ケテクレ／ドウゾナミナミツイデ  
オクレ／ 花ニ嵐ノタトエモアルゾ／「サヨナラ」  
ダケガ 人生ダ

別れと酒、古来この詩が日本人に愛され、現代日本人が演歌を愛する所以(ゆえん)もこの辺りに由来するかと思う。

さて、11年住み慣れた中央農業試験場から北見農業試験場に勤務することとなった。途中二年間の稲作部(岩見沢市)勤務も含めて、そのほぼ全期間にわたり、土壌病害を中心とする現地試験に関わり続けた。アスパラガスの茎枯病・衰退現象、食用ユリの根腐病、アズキ萎凋病。土壌病害が現地優先となるのは当然だった。研究内容のすべてが、病気を発生させる土(病土)に左右されるからだ。

病土が仲立ちとなって、人との出会いが生まれる。その連続の中で共同研究の原型も確かめられたように思う。農家、現地の農業改良普及所、それに研究者が全力投球する。そこからこそ、成果が生まれ信頼関係もでき上がったのだった。南羊蹄や伊達など

の、数多くの現地試験でそのことを教えられたのである。前出の詩句ではないが、時に酌み交わす酒も、共同研究を深める、とっておきの潤滑油ではあった。最も信頼するに足る友人が、下戸だったのは不思議としか言いようのないジョークではあったけれど。

仕事で何度か泊まった訓子府は、夜の星の美しさが印象深い。かねてから敬愛する、数人の方々に会えるのも待ち遠しい。しかしながら、病理研究者の悲しい性(さが)で、作物の病気とのあいにもまた、期待と不安で胸が騒ぐのである。(平成4年4月)

## 【桜桃忌】

一部の、といっても数万人に達するのだろう、若者達の心を捉(とら)えていた歌手・尾崎豊さんが亡くなった。テレビ・週刊誌では過熱に近い報道ぶりだったが、葬儀に集まった若者の、悲しみに沈んだ顔が妙に印象深かった。この歌手の死に、心底傷ついていると感じられたからだ。その顔を見ていると、太宰治とその作品を愛した友人のことが、しきりに思われた。

死のうと思っていた一、などと度肝を抜くような太宰の小説の書き出しが、読者を仰天させぬはずがない。さらに、若い心を締め付ける言葉の連続。どの作品も彫心鏤(る)骨の結晶だが、その努力を読む者に直接には感じさせないのがすごい。

もう三十年近く前のこと。大学の片隅で、暗澹(あんたん)たる心を抱えた数人の仲間が集まり、長時間語り合った。そして、何の結論も得られずに、散っていったのだった。その別れ際に「これ、お前にやるよ」と手渡されたのが『桜桃』という太宰の短編集だった。えっと相手を見返すほど驚いたのは、彼がおおよそ文学とは縁遠い理科系の学生だったからだ。

彼は卒業するとすぐ、郷里の長野県で教師になる、と札幌を去った。五年ほどしてもらった手紙には、腎臓結核で入院しており、学生結婚だった奥さんとは別れた、とあった。当方もそのころ、かなりの低きを彷徨(ほうこう)しており、返事を書けなかった。間もなく小康を得た彼は、退院したが一か月ほどで世を去った。29歳だった。

長野に帰る前に一度会った。お互いに黙って、ひたすら酒を飲むばかりだったが、「太宰の命日に桜桃忌ってのがあるそうだ。泉下の彼は、どんな顔しているのかな」と呟(つぶや)いたのが記憶に残る。

これもまたテレビ・雑誌での話だが、太宰の人気は大変なものだという。この十九日の桜桃忌には、今年もまた数多くの若者たちが、それぞれの思いを胸に、墓前に集まるのだろうか。

捨てがたき うすき書(ふみ)あり 桜桃忌(草香)(平成4年6月)

### 【悲愁の美】

あきこちゃんへ。落ち葉にも香りがあるんですね。そんなこと、すっかり忘れていました。

家から研究室までは、ゆっくり歩いても七、八分の僅(わず)かな道なのですが、その道沿いの木々が、さかんに枯れ葉を散らしています。朝、この道を歩くと、落ち葉の香りが、ひんやりした風に舞っています。

この前送った室生犀星の「津の国人」、すらすら読めたとのこと、驚いています。中学生に勧めるには、少し難しかったかと思っていたのです。でもよく考えてみると、平安朝から材料をとったこの本のみずみずしい文体は、あなたのような中学生にこそ、すんなり受け入れられるのかも知れません。

さて別便で、平家物語(全三冊)送りました。三冊を一度にしたのには、わけがあるのですが、そのことはあと書きで書きます。まず声を出して読むことを勧めます。意味が分かるかどうかは気にしないで、どんどん読んで下さい。まったく不思議なのですが、そのうち感じがつかめてくる筈(はず)です。

今日送った新潮社版のものは、本文の横にちょっとした口語訳が付いていますから、それがいい手助けになってくれます。少しだけいいところを書いてみます。

“昨日は東山の関のふもとに轡(くつばみ)を並べ、今日は西海の波の上に纜(ともずな)を解く。

雲海沈々として晴天まさに暮なんとす。孤島に霧へだたって、月海上に浮かぶ”(第七十句、平家一門都落ち)

どう、読みたくなるでしょう。本は最初から丁寧に、というのはこの物語には無用。三冊の中には気に入るところがきっとあるでしょう。その節を何度も読んで欲しい、と思うのです。

研究室の窓から、前庭の楓(かえで)が見えます。夕陽に生えるその紅葉は、息を呑(の)む美しさでした。この春、訓子府に来て印象に残ったものの一つです。そしてすぐ連想したのが、この平家物語に出てくる場面でした。

そう、非愁美(水原一氏の言葉)の漂う蕭(しめ)やかな感動に、この本を通じて出合っしてほしいものです。ではまた。(平成4年10月)

### 【わが“遠き落日”】

医学者・野口英世とその母を描いた「遠き落日」。その映画が昨年全国各地で静かな人気を呼んだようだ。ある大学の集中講義に行ったとき、女子学生達がこの作品を話題にするのを聞いた。当世の若い女性と偉人伝の代表的人物とされる野口がどう結びつくのか、不思議な気がした。もうだいぶ前のことだが、野口英世についてかなり読んだことがある。私の少年時は、まだ戦中戦後の残影の雰囲気があった。そのせいか、英世の勤勉・忍耐や母親シカの母性愛が、修身教育の徳目風に並んでおり、一種の鬱陶(うっとう)しさがあった。が、これは意図的に塗りこめられた虚像で、実像はまるで異なっていたようだ。研究に没頭しているときを除けば、「酒呑み、金銭感覚の欠如」など破壊型の彼の性格。また、その一方では、功名心、嫉妬心をもつ、まことに人間らしい人間なのであった。さきの映画の原作である渡辺淳一氏の同名の小説もそれなりに面白かったが、中山茂氏の評伝(朝日選書)は大変な力作で含蓄が深かった。史実に重点をおく伝記の方が、読者にはより想像力をふくらませるのだろう。昨年四月に訓子府に転勤になった。研究部長という本来の研究から、やや疎外(そわい)されそうな場所にいると、若い研究者との対話が楽しい。少しの時間でのささやかな実験。その僅かなデータを橋渡しにして、当方の一方的な思い込みの友情が生まれる(と信じる)。時に研究者のバックグラウンドの話がでる。野口の生き方は、科学者というより職人的研究者のそのようだ。われわれが自覚するか

どうか、事実がそうであるか否かは別として、研究者としての心情は、わが農業試験場の中にも共通の痕跡として引き摺っているはずだ。だから野口のもつ「揺れる心」や功名心・嫉妬心はまた、わが心中にも息づいているとみていい、と話す。研究室にふらりと入って行くと「どうです。最近、功名・嫉妬の方は」と口の悪い若者が話しかけてくる。(平成5年1月)

### 【魔女の部屋】

歴代の前任者(場長)のお陰で、かなり広い部屋を独り占めさせてもらっている。部屋の一角に実験台まである。といってもそれは、少し大きめのテーブルのことであり、試験管などガラス器具が乱立している。試験管には、年来の友である病原菌が封印されている。私にはお気に入りのコーナーだが、先日立ち寄った友人が「魔女の部屋だな」とからかった。

さて、この机の上にタマネギがある。通常食べるタマネギを、水の入った広口の瓶の上に置いてある。白い根と葉が出ていて、葉の表面には、ステンフィリウムという病原菌(かび)の胞子が吹き付けてある。

この菌には、タマネギを侵すものと、アスパラガスを侵すものの二つがある。それぞれの胞子の姿形や培養性質は、そっくりだ。だから、病原菌としては両者は同じものと考えていいのだが、不思議なことに、その関係を確かめた実験がない。そこで今、アスパラガスの菌を、タマネギの葉に付けてどうなるかを探っているところなのである。葉に斑点(はんてん)が出て発病してくれば、両者に共通の病原菌としての、証明にぐんと近づく。

なぜこんなことをするのか。それはこの病原菌に対して、アスパラガスは非常に鋭敏に反応するからで、この能力をタマネギの方で利用しようというのが、私の狙いだ。アスパラガスをタマネギ畑に植えておいて、病原菌の侵入を予知してもらう。この予知こそ、作物の病害防除最大のポイントになるからだ。

筋の面白い、物語風の仮説は、実験で成功することが余りない。が、しかし、ここは「魔女の部屋」だ。あっと驚く魔法を生み出し、口の悪い友人から

一本取りたいものである。(平成11年2月)

### 【オニオン・ロード】

ジャガイモの花が咲き乱れている。ビール原料になる大麦は、その穂先がキラキラと反射し、畑全体が風に揺られて波立つ。ビート畑も広がる。北見から網走に抜ける小高い丘からは、これらの作物が整然と区画され、パッチワークさながらに並んでいる。

この中に姿は地味だが、タマネギがあることを忘れないで欲しい。日本のタマネギの8割以上が北海道産で、その半分近くは北見地方で栽培されている。この畑を通る道はオニオン・ロードと呼ばれるほどの活況を呈している。だが、ここまでに至るには幾多の試練に出会った。その一つが病害の克服だ。

1973年、北海道のタマネギは乾腐(かんぶ)病の大被害を受けた。これは根の付いているところから病原菌が侵入して玉が腐ってしまうもの。道内各地タマネギがこの病気のためにバタバタと倒れた。北見地方でも3割近くが収穫不能となった。

私のタマネギとの出会いはこのときからで、移植苗を消毒する方法を開発した。だがこれは対症療法であり根本的な対策には抵抗性品種づくりが不可欠である。これにはアメリカ・ウィスコンシン大学のガーベルマン教授の貢献が大きかった。

抵抗性品種を作る手法を得るために、育種の研究者と共に、ハワイのアメリカ園芸学会で初めて博士に会ったのは、1975年。その後研究上の示唆はもとより、自ら開発した遺伝資源も惜しみなく送っていただいた。かくして北海道に適した病気に強い品種が誕生する。

今日活況を呈しているオニオン・ロードのかげには、博士の尽力と、それを実践に生かした農家の人々の努力がある。すくすくと育つタマネギは、そう語っている。(平成11年7月)